

2024 年度入学試験問題

国 語

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の注意事項をよく読んでください。
その際、問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子のページ数は 31 ページです。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手をあげて監督者に知らせなさい。
4. 解答は解答用紙の問題番号に対応した解答欄ごとに1つだけをマークすること。
同じ解答欄に2つ以上マークすると無効となります。なお、解答用紙の番号は①～⑥まで記入してありますが、問題によっては解答する選択肢が6つ無い場合があります。
5. 解答は HB の黒鉛筆を使用すること。
6. 誤ってマークした場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを完全に取除いたうえ、新たにマークし直すこと。
7. 問題冊子の余白等は自由に利用してかまいません。
8. 解答用紙を持ち出してはいけません。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

計算の歴史を紐解いていくとき、認識の「確実さ」をしつこく追求したデカルトの時代に、一つの大きな画期を見出すことができる。古代ギリシア幾何学に体现される数学的な認識に心奪われたデカルトは、数学的な思考の本質を方法として取り出し、これを他の学問にも適用していきたく願ったのだった。彼の当初の計画のすべてが実現したわけではなかったが、哲学的な動機に駆動されたデカルトの数学研究は、代数的な計算による幾何学という、まったく新たな数学の可能性を開いた。ここに至って計算は、もはや単なる数の操作ではなくなり、確実な推論を支える方法として、新たな生命を宿し始めた。

十九世紀のリーマン(注1)の時代には、数式と計算の代わりに、概念に駆動された数学が花開いた。リーマンと同じゲッティンゲン(注2)で数学を学んだフレーゲ(注3)は、基礎的な概念へとソ(ア)キュウ(イ)していく当時の数学の潮流のなかで、数学の最も基本的な概念である「数」を理解することに生涯をかけ、その過程で現代の論理学を生み出していった。フレーゲの挑戦は、あくまで規則に従う記号の操作に徹して、人間の思考に迫ろうとするものだった。「計算する機械」に、知能が宿る可能性をチューリング(注4)が見出すことができたのもまた、先人がこうして地道に積み上げてきた、計算を囲む文脈があったからだだった。

記号を操作するだけの機械も、しかるべき規則を与えることができれば、思考することができるのではないか。ここから、機械を使って人間の知能を模倣していく、人工知能の探求が動き出していく。

いまや計算機は圧倒的な速度で膨大なデータを処理できるようになり、人工知能は将棋や囲碁などの高度なゲームでも、人間を打ち負かすまでになった。計算による予測の網は社会の隅々にまで張りめぐらされ、もはや私たちが生きる日常の一部だ。粘土の塊を一つずつ動かしていくことが計算のすべてだった時代から、こんなにも遠くまで来たのだ。

A 現代の科学はいまなお、生命と計算の間に横たわる巨大な距離を、埋められずにいる。人工知能の最先端の技術も、現状ではあくまで、行為する動機を外部から与えられた「自動的 (automatic)」な機械の域を出ていない。いまのところ人間は、行為する動機をみずから生み出せるような(1)「自律的 (autonomous)」なシステムを構築する方法を知らないのだ。

生命の本質が「自律性」にあるとする見方はしかし、これじたい決して自明ではない。化学物質の配置に操られて動くバクテリアや、光に向かって反射的に飛び込んでいく夏の虫などを見ていたら、生命もまた、外界からの入力に支配された他律系だと感じられるかもしれない。実際、黎明期の認知科学は、生物の認知システムもまた、計算機と同様、他律的に作動するものだと仮定していたのだ。

このとき暗黙のうちに想定されていたのが、「外界からの入力―(表象による) 内的な情報処理―外界への出力」というモデルである。一見すると当たり前に思えるかもしれないが、認知主体の内部と外部に世界を画然と分かつこうした発想は、認知主体を、認知主体の外部から観察する特殊な視点に根ざしていた。

このことの限界を指摘し、生命を自律的なシステムとして見る新しい思考を切り開いていったのが、チリの生物学者ウンベル・マトウラーナ（一九二八―）である。

B、カエルがハエを認識し、それを捕食する場面を想像してみよう。このとき、カエルを外から観察する視点からすれば、カエルの外部に、カエルとは独立した「本当の世界」があるように見える。ハエは、カエルとは独立した世界に存在している、カエルはその外部にいるハエを内的に表象している。だからこそ、それを捕まえることができるのだ、と。

ところが、今度はカエルの視点に立つてみると、本当の世界などどこにもないことに気づく。カエルが経験できるのは、どこまでもカエルの世界でしかない。カエルの立場からすれば、入力も出力もないのだ。

認知主体の外から、認知主体を見晴らす観察者の視点に立つとき、「入力―情報処理―出力」という他律的なモデルが妥当に思えるが、認知主体の立場から見ると、事態はまったく異なってくるのである。

ありのままの認知現象を捉えようとするならば、まず、認知主体の外部に「本当の世界」を措定してしまう、特権的な観察者の立場を捨てなければならない。マトウラーナは、共同研究者フランシスコ・ヴァレラ（一九四六―二〇〇一）との共著『オートポイエーシスと認知』（*Autopoiesis and Cognition*, 1980）の序文のなかで、このことに気づき、生物学に対するスタンスを変え、ることになったケイ⁽⁴⁾イを打ち明けている。

マトウラーナはもともと、カエルやハトなどを対象として、生物の色知覚に関する研究をしていた。このとき彼は、物理的な刺激と、これに応答する神経系の活動の間に、素直な対応があると想定していた。つまり、客観的な色彩世界を、生物は神経細胞の活動によって「表象」していると考えていたのだ。とすれば、やるべき仕事は、外界の色に対応する神経細胞の活動パターンを見つけ出すことにあるはずだった。

C、研究はほどなく壁にぶち当たった。外界からの刺激と、ハトの神経系の活動パターン^(ウ)の間に、素直な対応が見つからなかったのだ。同じ波長の光の刺激に対して、異なる神経活動のパターンが観測されることがしばしばあった。ハトの神経活動を調べている限り、客観的な色彩世界の存在をシ^(ウ)サ^(ウ)するものはどこにもなかったのである。

D 彼は、発想を大胆に変えてみることにした。ハトの網膜と神経系は、ハトと独立にある外界を再現しようとしているのではなく、むしろハトにとつての色世界を生成するシステムなのではないか。ここから彼は、研究へのアプローチをがらりと変える。

生物の神経系は、外界を内的に描写しているのではなく、外的な刺激をきっかけとしながら、あくまで 自己自身に反復的に 応答し続けている。生物そのものもまた、外界からの刺激に支配された他律系ではなく、みずからの活動のパターンに規制された、自律的なシステムとして理解されるべきなのではないか。こうした着想を起点に、彼はその後、新しい生物学の領域を切り開いていく。

では、生命そのもののような自律性を持つシステムを、人工的に作り出すことは可能なのだろうか。これは前章^(注5)で見た通り、人工生命を追求する科学者が、まさにいまも全力で取り組んでいる問いだが、まだ誰も答えは知らない。自律的な生命と、自動的な計算の間には、依然として大きな溝が広がっているのだ。

この間隙を性急に埋めようとするとき、生命を計算に近づけようとする結果にもなりかねない。極端な話、私たち自身が外から与えられた規則を遵守するだけの自動的な機械になってしまえば、計算と生命の溝は埋まる。スマホに流れてくる情報に反射しながら、ゆつくりと息つくまもなくせつせとデータをコンピュータに供給し続ける私たちは、計算を生命に近づけようとして

いるより、みずからを機械に近づけようとしているようにも見える。だが、これでは明らかに本末転倒である。

^(注6)ドレイファスはすでに半世紀前に、計算機が人間に近づいていくより、むしろ、人間が計算機に近づいていく未来の危険性を説いた。人間を超える知能を持つ機械の出現ではなく、人間の知性が機械のようになしか作動しなくなることこそ恐れるべきだと語ったのだ。

肝心なことは、計算と生命を対立させ、その間隙を埋めようとするのではない。これまでも、そしてこれからもますます計算と雑^{まき}り合いながら拡張していく人間の認識の可能性を、何に向け、どのように育んでいくかが問われているのだ。

⁽³⁾^(注7)モンテイ・バイソンの「哲学者サッカー」(The Philosophers' Football Match) というスケッチ・コメディがある。これは、古代ギリシアとドイツの哲学者たちが、サッカーで対決するというシュールな喜劇だ。古代ギリシアチームには、ソクラテスやプラトン、アリストテレスやアルキメデスら、錚々たるメンバーがいる。ドイツチームもまた、カント、ヘーゲル、ハイデガー、マルクスなど、豪華な布陣である。

最初に審判の孔子が試合開始の笛を鳴らす。ところが、哲学者たちは一向にボールを蹴ろうとしない。「はたしてボールは実在するのか」「そもそもサッカーとは何であるか」など、それぞれの哲学的な思索に忙しい様子だ。

そのまま前半戦が何も起きないまま終わる。(……中略……)

ところが哲学者たちは、試合の進行から切り離されたまま、状況と無縁な思考に耽り、しかも結論が出るまで動こうとしない。目の前の状況に流されないことは、抽象的な思考をくり広げるためには必要なことかもしれない。ゲームの前提そのものにも立ち返り、仮説を問い直す思考こそ、しばしば新たな世界を開拓してきた。だが、少なくともサッカー場においては、状況を踏まえない知性は滑稽でしかない。

状況に即座に対応すべき場面で思索に耽る——そんな哲学者たちの姿を「哲学者サッカー」はコミカルに描き出す。が、私たちはこれを、喜劇として笑い飛ばすことができるだろうか。地球温暖化について、生物多様性の喪失について、私たちが直面し

ている様々な危機について、世界中の科学者たちがいまも膨大なデータを解析し、未来のシミュレーションをしている。人類を総体として見れば、地球環境について懸命にデータを集め、膨大な計算をしていると言えよう。

だが、計算し、データを蓄積する一方で、まるで「哲学者サッカー」の哲学者たちのように、結論が出るまで動こうとしない。

モートン^(注8)は、著書『ハイパーオブジェクト』のなかで、地球環境の危機に直面しながらこれに応答することができないままでいる私たちの姿を、少女が道路に飛び出そうとしているのを助けようとしないう「無責任」な人間になぞらえている。

(……中略……)

子どもが危険な道路に飛び出そうとしているとき、果たして本当に轢かれるのか、あるいは、轢かれる確率がどれくらいなのか、それを計算している間は間に合わないのだ。十分な理由を見つかるまで動かないことはこの場合、それ自体が倫理に背く行いになる。

目の前で子どもが道路に飛び出そうとしているのを目撃したら、思わず、手を差し伸べるだろう。考える前にパスを出すスポーツ選手のように、気づいたときには子を助けようとするだろう。これこそが、字義通りの「responsibility」である。

「responsibility」は「責任」とも訳されるが、文字通りには、「応答 (respond)」「する」「能力 (ability)」のことだ。

溶解していく氷床や、失われていく生物多様性、崩壊していく海洋生態系などの環境の異変に対して、私たちは幼子に対するのと同じように速やかに応答することができていない。まるで、道路に飛び出す子を前にしながら、轢かれる証拠が揃うまで動こうとしない機械のように、計算ばかりしていて動かない。

このままでは、ドレイファスが^(E)キグした状況そのものではないか。機械が人間に近づくのではなく、人間がまるで機械のように、目の状況に応答する力を発揮しないまま、計算に耽溺しているのだ。

正しく計算結果を導出するだけでなく、計算の帰結を、意味に翻訳するために、数学者たちが数々の概念を生み出してきた歴

史を本書では見てきた。だが、もはや人間が意味や概念を生み出していく速度では追いつかないほど、計算は加速し続けている。コンピュータが扱えるデータ量が急激に増大しているいま、そもそも計算に意味を感じることも自体が、ますます難しくなってきた。

E、意味の理解は放置したままでも、計算の結果が役立つってしまうのが、近年の人工知能の技術の驚くべきところだ。計算の意味を考え、理解のための概念的な枠組みを構築せずとも、コンピュータに大量のデータを投入してしまえば、魔法のように問題が解かれてしまうことも珍しくない。

たとえば、人工知能を研究するアメリカの非営利団体オープンAIが二〇二〇年六月に公開した「GPT-3」^(注9)は、人間が書いたものとはほとんど見分けがつかない水準のエッセイや詩、プログラムのコードなどを自動生成してしまいうる驚くべき技術で、公開とともに、最新の人工知能の超速の進歩を世界に印象づけた。

GPT-3は、ウェブや電子書籍から収集した一兆語近い単語の統計的なパターンを学習して文章を作成していて、人間のよいうに言葉を「理解」しながら作文をするわけではない。肝心なのは、意味よりもデータであり、理解よりも結果なのだ。こうした技術が目覚しく進歩していくなかで、意味や仕組みを問わずとも、計算の結果さえ役に立つなら、それでいいではないかという風潮も広がってきている。

だが、意味や理解を伴うことのないまま、計算が現実介入するとき、私たちは知らず知らずのうちに他律化していく。しかも他律化した人間を支配するのは、あくまでまた、別の人間である。何しろコンピュータに意志や意図はない。膨大なデータを処理する機械の作動に振り回されるとき、私たちは「人間を超えた」機械に支配されているのではなく、人間が過去に設定した「隠された仮説」に、支配されているだけなのだ。

^(注10) キャシー・オニールは著書『数学破壊兵器』(Weapons of Math Destruction, 2016)のなかで、中立的で透明な計算という装いのもと、しばしばいかに暴力的な先人観や偏見が、アルゴリズムに潜り込んでいるかを、様々な事例とともに紹介している。ある人物がリスクの高い借り手かどうか、テロリストかどうか、あるいは、教師として適任かどうかの「可能性」が、大量の統計

処理とともに、人間が設計したアルゴリズムのもとで計算される。こうした計算の結果が、一人の人生をひっくり返してしまうこともある。

だが、神託のように下されるアルゴリズムに潜伏している、見えない偏見や仮説を意味として取り出してくることは、ますます難しくなってきたのだ。

深く計算が浸透し、自動化が進んでいく現代の社会が抱える問題は、「過去が未来を食べている」ことであると、モートンは二〇二〇年に開催されたオンライン講演『Geoträume』のなかで語った。

計算を縛る規則は、計算に先立って決められている。これは、人間の代わりにコンピュータが計算をする場合も同じだ。学習に基づいてプログラムを更新できる人工知能であっても、プログラムの更新の仕方そのものは、厳密にあらかじめ設計者によって規定されている。だからこそ、過去に決められた規則を遵守するだけの機械に、無自覚に身を委ねていくことは、未来を過去に食わせることになる。

だが本書ではむしろ、計算が未来を開いてきた歴史を見てきた。

計算の帰結を受け止め、意味を問い直し続ける営みが、未知の世界を開いてきた。規則にしたがって記号を操ることと、その意味をわかろうとするこの緊張関係が、計算に生命を吹き込んだのだった。

計算が加速し続けるこの時代に、過去による未来のシン(オ)シヨクに抗うためには、わかることと操ることの緊張関係を、保ち続けなければならない。緊張関係を性急に手放し、計算の帰結に生命として応答する自律性を失くしてしまえば、計算は、ただひたすら過去が未来を食べるだけの活動になる。

人はみな、計算の結果を生み出すだけの機械ではない。かといって、与えられた意味に安住するだけの生き物でもない。計算し、計算の帰結に柔軟に応答しながら、現実を新たに編み直し続けてきた計算する生命である。

指や粘土の操作でしかなかった計算が、人間と雑り合いながら新たな意味を生み出し、成長してきた歴史をたどってきた本書

を通して、浮び上がってきたのはこのような、私たち自身の自画像である。

激動する不確実な地球環境のなか、他の生物種たちとともにこの地上で生き延びていくためには、計算を通してしか接触できない他者にすら、応答する力を発揮していかなければならない。このためには、計算による認識の大胆な拡張とともに、自律的な思考と行為による意味の生成を、これからも続けていかなければならないだろう。

計算と生命の雑種ハイブリットとしての、私たちの本領が試されているのだ。

（森田真生『計算する生命』による）

- (注1) リーマン——一八二六〜一八六六。ベルンハルト・リーマン。十九世紀を代表するドイツの数学者。
- (注2) ゲッティンゲン——一七三七年創立のドイツの公立大学。
- (注3) フレーゲ——一八四八〜一九二五。ゴットロープ・フレーゲ。ドイツの哲学者、論理学者、数学者。
- (注4) チューリング——一九二二〜一九五四。アラン・チューリング。イギリスの数学者、暗号研究者、計算機科学者、哲学者。
- (注5) 前章——本文の出典『計算する生命』の第四章。以下、本文中の「本書」も、この本を指す。
- (注6) ドレイファス——一九二九〜二〇一七。ヒューバート・ドレイファス。アメリカの哲学者。
- (注7) モンティ・パイソン——一九六〇年代末から七〇年代にかけて一世を風靡したイギリスのコメディ・グループ。
- (注8) モートン——一九六八〜。テイモシー・モートン。イギリスの文学研究者。
- (注9) GPT-3——文章生成AIに用いる計算機モデル。これを用いたサービスがChatGPT(二〇二二年)である。
- (注10) キャシー・オニール——一九七二〜。アメリカの数学者、データ科学者、作家。

*問題の作成上の都合で本文の一部に手を加えてある。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5。

(ア) ソキユウ

- 1
- ① 映画のハイキユウ会社を調べる
 - ② 背任の可能性にゲンキユウする
 - ③ 保身にキユウキユウとする
 - ④ キンキユウ事態に備えておく
 - ⑤ 武運チヨウキユウを祈る

(イ) ケイイ

- 2
- ① 伝説的なイギョウの達成
 - ② まったくイソウの異なる問題
 - ③ 言葉の裏に隠されたシンイ
 - ④ ナンイ三十度線上に浮かぶ島
 - ⑤ 親族の素行調査のイライ

(ウ) シサ

- 3
- ① 式典の準備をサハイする
 - ② 学術論文のサドクを行う
 - ③ リユウサに気をつけながら歩く
 - ④ 上司のホサ役を仰せつかる
 - ⑤ 詐欺のキョウサを疑われた

(エ) キグ

- 4
- ① ヒキ交々の光景が映し出される
 - ② 民主主義がキタイに瀕する
 - ③ キセンの別なく宴会を楽しむ
 - ④ 自宅タイキを命ぜられる
 - ⑤ 祖父は今年コキを迎える

(オ) シンシヨク

- 5
- ① シヨクサン興業に邁進する
 - ② カンシヨクに追いやられる
 - ③ フンシヨク決算が露見する
 - ④ カンシヨクを用いて描く
 - ⑤ 廃屋の屋根がフシヨクしている

問2 空欄

A

く

E

を補うのに最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号はA—6、B—7、C—8、D—9、E—10。

- ① たとえば
- ② むしろ
- ③ それでも
- ④ そこで
- ⑤ すなわち
- ⑥ ところが

問3

傍線部(1)「『自律的 (autonomous)』なシステムを構築する方法を知らない」とあるが、筆者がそのようにいう理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は11。

- ① 人間は現状、所与のアルゴリズムに則って自己更新するプログラムを作る以上のことはできないから。
- ② 認知科学はその初期の段階から、生命を外界からの刺激に応じて反応する有機体と想定していたから。
- ③ 生命は外界からの一定の刺激に常に同じ反応をするわけではないことが明らかになったから。
- ④ 自律性はその本質があるという生命観は、認知科学の黎明期にすでに否定された前時代的なものだから。
- ⑤ 創作物を自動的に生成する人工知能の登場によって、行動の動機や意味を問う必要性がなくなったから。

問4 傍線部(2)「自己自身に反復的に応答し続けている」とあるが、「自己自身に反復的に応答」するとはどういうことか。

その説明として最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 生命にとって外的な刺激はきつかけにすぎず、そこからどのような世界の姿を捉えるかはあくまでその生物個体が意識的に構成するイメージによって決まるということ。
- ② 客観的に存在する外界の事物や状況に対し、生命はそれぞれが主観的に意味や価値を与えながら認識するので、同一の刺激に常に同一の反応をするわけではないということ。
- ③ 生命は自己の外界の事物やそれから受ける刺激を、それぞれの生物種固有の内的枠組みに照らし合わせながら認識し、自己と対象との関係を判断しているということ。
- ④ その時の状況によって反応のあり方を変える生命が、対象へ常に同じ対応をするとは限らないことから見ても、生命と外界との関係は一樣ではないということ。
- ⑤ 生命はあらかじめ保有している自己の活動パターンにしたがって外界に反応する自律的なものであって、外界からの影響は問題とされないものだということ。

問5 傍線部(3)「モンティ・パイソンの『哲学者サッカー』(The Philosophers' Football Match)」というスケッチ・コメディー

がある」とあるが、筆者がこの「スケッチ・コメディー」を紹介する目的はどこにあると思われるか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 勝利を目指して協働すべき場合でも自己の思索に没頭してしまう哲学者を例に、優先順位を無視してできることから始める発想に疑義を呈し、なによりも問題を整理分析して優先順位を判断し、その上で思索する重要性を示すため。
- ② ゲームそっちのけで自己の思索の結論が出るまで動こうとしない哲学者たちの姿を通じて、喫緊の問題を置き去りにしてデータの蓄積と計算に明け暮れている科学の現状を批判し、人間の行動が本質を忘れた機械的反応に終始する危険を指摘するため。
- ③ チームで行動すべきときにも自己の思想的課題の考察を優先する哲学者たちの戯画を示すことで、自己の学問的業績を挙げるための膨大なデータ分析と計算ばかりで互いに協力して環境問題に対処しようとする研究者を批判するため。
- ④ ゲームの勝敗を度外視して自分で見つけた課題を考察しつづける哲学者たちのような、目的達成よりもそのためのデータ収集と分析に注力している現代科学の滑稽さを指摘することで、真の目的を見失った行動のむなしさを印象づけるため。
- ⑤ 自己の哲学的課題の結論が出るまで決して行動しようとしないう哲学者たちと同様に、計算結果が出る前に果敢に行動することを避けようとする現代科学の問題を指摘し、まずは行動したうえで必要に応じて方向を修正してゆくことの重要性を訴えるため。

問6

傍線部(4)「『隠された仮説』に、支配されている」の具体的事例として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は14。

- ① より効率的で強力な暗号解読プログラムが開発されているにもかかわらず、それが導入されないために旧式のプログラムで不便を蒙っている。
- ② 子どもの頃に転落事故に遭って大怪我をした記憶がトラウマとなって、大人になっても高いところに立つと目眩を起こしてしまう。
- ③ 就職の内定をもらったが、離職率の高い業界の会社だったため仕事を続けてゆく自信が持てず、他の業界への就職を模索することにした。
- ④ ブラジルと日本では過去のワールドカップでの実績が圧倒的に違うため、今回のワールドカップでも日本チームはブラジルチームに敵わなかった。
- ⑤ 日本では戦前から「家事と子育てが女性の仕事」という家族観が一般化していたために、現代でも他国に比べて女性の社会進出が遅れている。

問7

本文の筆者の主張と合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。解答番号は 15・16。

- ① デカルト以来、確実な推論の基盤として発展してきた計算だが、それが客観的な数値と記号の操作を前提とする以上、生命の内的論理を捉えてゆくためには不十分で一面的な認識にしか到達できない。
- ② 膨大なデータを圧倒的な速度で自動的に処理できる計算機の登場で、人工知能の技術も高度に発達したが、いまだに自律的に活動する生命を生み出せないのは「自律」という概念の不分明さがその要因である。
- ③ 生命を特徴づけ、機械との違いを明確にするのはその自律性だが、人間は自ら考案した計算というシステムが人間自身の自律性を否定する危険性を理解し、計算を再び自己の支配下に置かなければならない。
- ④ 生活の隅々にまで浸透した計算技術だが、意味や内実を理解しないまま無自覚にその利便性に依存する生活を送りつづけることによって、人間が機械の都合に合わせて認識し判断するようになる可能性がある。
- ⑤ 飛躍的な発展を遂げ、ついには詩や文章、コンピュータのプログラムコードまで自動的に生成するAIの登場によって、その意味や仕組みに対する理解より、利便性の向上を重視すべきだという考え方もある。
- ⑥ その意味を問うことなく計算の結果が役立つようになった現代にこそ、計算の結果に自律的に応答しながら新たな地平を切り拓いてきたという計算と人間との関係を今一度見つめ直す必要がある。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

社会的連帯 (social solidarity) には大きく分けて二つの形態がある。「人称的な」 (interpersonal) 連帯とは、具体的な他者に頼る・頼られることを意味する。家族のような親密圏におけるケアの実践 (顔の見える他者の生の必要・困難への直接的対応) は、人称的な連帯の例である。他方、非人称の (impersonal) 連帯とは、一般的な他者に頼る・頼られることである。たとえば、社会保険は被保険者の間の非人称の連帯に支えられている。

家族や地域の共同体における人称的な連帯が消滅したり、不要になったりすることはないだろう。しかし、後に見るように人稱的な連帯には固有の危険もある。

I 人称的な連帯に加えて、見知らぬ他者との間に非人称の社会的連帯を形成し、維持すべき理由とは何か。ある社会の内部で社会保障のかたちをとった再分配 (資源の移転) を支持しうる理由とは何か。

第一は生の動員 (mobilization) である。国民の生 (生命・身体) を戦争や生産のために動員し、「国力」を増強するために社会保障は行われてきた。^(注1) ミシェル・フーコーのいう「生権力」の一形態としての社会保障である。ここには、労働者に対する生活保障を提供することで、階級対立を抑止し、「国民」の一体性を高めることも含まれる。有名な例は十九世紀ドイツの「鉄血宰相」^(注2) ビスマルクの社会政策である。

動員が社会保障の推進力の一つであったことは間違いない。しかし、動員の陰の側面も見落とすべきではない。

II たとえば、旧優生保護法 (一九四八―一九六年) のもとで行われた障害者に対する不妊手術の強制などが挙げられる。私たちは動員だけに頼るべきではないと思われる。

第二は生のリスク (risk) である。生につきまとうさまざまなリスクに対応するためのコストを分散させて共有することは合理的である。各人の合理的な利害計算 (一度には背負いきれないコストに備えて普段から少しずつお金を積み立てておく) が、

社会大に拡大されると、結果として社会的連帯をもたらす（一人では背負いきれないコストを大勢で分担する）。疾病、労災、失業、要介護といったリスクに対処するために、リスクに直面しないときに保険をかけておく社会保険制度に、この考えは典型的にあらわれている。

リスク対応としての社会保障には限界もある。①リスクは均等に分配されているわけではなく、偏在している。たとえば、特定の病気にかかりやすい人とそうでない人がいる。そのため、リスクの偏在に対する認知可能性の増大（たとえば、遺伝子検査による疾病罹患可能性の算出）によって、連帯の基盤が掘り崩される可能性がある。②保険である以上、保険料を納める必要がある。保険料を拠出できる者と拠出できない者との格差が生じること（無保険者の存在）は避けられない。Ⅲ しながら、生まれつき高い健康リスクを負っていたり、高い所得を得るための才能に恵まれなかったりすることが、当人に責任のない偶然性の一部であるとすれば、⁽¹⁾ こうした不運に対する公的な手当てがなされてしかるべきではないか。

そこで第三に、生の偶然性 (contingency) が社会保障の理由となる。自然的偶然性 (才能や障碍)、社会的偶然性 (出身家庭)、運・不運の偶然性 (自然災害など) への対応として社会保障を行うべきだとの考えである。恵まれた生の条件をたまたま得た者からそうでない者への資源の移転 (補償) が Ⅹ される背後には、自分ではどうしようもできない諸事情ゆえに不利を強いられるのは不正であるとする、運の平等主義の考えが存在すると言える。

しかし運の平等主義に限界があることは^(注3) すでに見た。ここでは次の点を確認したい。①偶然と選択を分ける境界に明確な線を引きくことは困難である。②偶然の選択への書き換え (たとえば、出生前診断と選択的中絶) が強いられるおそれがある。③補償と引き換えに、補償を受ける人びとに劣位性の自己認識を迫り、自己尊重を損なうおそれがある。 Ⅳ

そこで第四に、偶然性よりもいっそう根本的な生の脆弱性 (vulnerability/precariousness) に注目が向けられる。生命 (心身) の根本的な有限性ないし脆弱性のゆえに、誰も他者への依存 (dependency) を避けることはできない。この脆弱性は生、

育、老、病、死という生の諸局面において顕在化する。

V

誰もが他者に依存することなしには生を保ちがたい、脆弱

な存在者であるという事実を承認するとき、依存の

Y

を受け止める対応としての社会的連帯が正当化されるだろう。

依存自体は当たり前のことであり問題ではないが、依存が支配 (domination) に通じる危険性は指摘しておかなければならない。他者からの支配を被ることが避けられるべき重大な不正であることは、多くの論者が指摘している。たとえば、^(注4)フライリップ・ペティット (一九四五―) は、支配、すなわち他者からの恣意的な干渉・介入の可能性にさらされることは、自由を失うことであると主張する (『共和主義』、一九九七年)。実際の干渉が行われるかは必ずしも重要ではない。また干渉とは積極的に妨害や暴行をすることに限られない。あなたが誰かの財政的な支援や、心身的な介護に依存しているでしょう。支援や介護を与えるか否かが、ひとえにその誰かの意思にかかっている程度に依拠して、あなたは不自由である。昨日まで支援してくれた人が今日は一方的に支援を打ち切ることができるとしたら、あなたはその人に支配されており、自由ではない。実際に打ち切らなくとも、いつでも打ち切ることができるといふ点が重要である。介護してくれる人がそれと引き換えに性的な関係を求めたとき拒否することが難しいならば、目下のところそのように迫られてはいないとしても、あなたはやはり自由ではない。その相手が迫ろうと思えば迫れるという時点で、あなたは支配されている。そしてペティットによれば、誰からも支配されないということ (支配の不在) は、私たちにとってとくに重要な自由なのである。

ようするに、他者への依存が、他者の一方的で恣意的な意思への依存となると、依存者はその他者に支配される。残念ながら家族のような親密圏での人称的連帯には、支配の危険性がつきまとう。家族からの介護を受ける障碍者や高齢者が、介護者によって支配される場合を考えてほしい。逆の場合も考えられる。高齢の親を介護する家族が、被介護者の意思に「振り回されて」、身動きが取れなくなることがあるかもしれない。

こうした親密圏での支配の問題を緩和するためには、具体的な他者への依存から非人称の制度化された相互依存への切り替えが有効だろう。たとえば、ケア・ワーク (依存対応労働) の「脱私事化」がそれである。こうして、⁽²⁾生の脆弱性は非人称の連帯を求める理由となるのである。

第五に、生の複数性 (plurality/pluralization) を挙げる事ができる。ここで複数性とは、人びとの生き方がそれぞれ異なり多様であることである (アーレントの複数性の観念を参照してほしい)^(注5)。複数性は自らが実現しえない価値の享受をもたらす。あなたとは異なる才能をもった人びとがいて、あなたとは違うキャリアを送ることによって、あなたはその人びとのつくりだす価値を享受できるのである。しかし多様な「生の見通し」が開かれていない場合、「生の計画」は貧困化・画一化して差異は生まれない。そこで、多様な才能の活用とそれらの間の相補性の形成のために、社会保障が有益である。人びとの多様な生き方を可能にし、また促すための社会的資源の分配として、社会保障が正当化されるのである。

高リスクの職業の人びとと、どうしたら連帯できるかという問いに対する、一つの答えは複数性にある。多様な能力をもつ人びとの間の社会的協働 (分業) の利益と、その利益に関して社会全体が負う負債を前提とすると、さまざまな職業の人びとと連帯することは各人にとって合理的であると同時に義務となる。実際にも、社会保険の制度化における、危険だが社会的に必要な仕事を引き受けてくれる人びととの連帯は、このようにして正当化されたのである (重田園江『連帯の哲学I』、二〇一〇年)。

生のリスク、生の偶然性、生の脆弱性、生の複数性はいずれも、人びとが他者の (恣意的に発動されうる) 意思に依存せざるをえない状態に陥るのを避けようとする点で、「生の自律」 (autonomy) の尊重を根本的な価値の一つとして重視している。ただしこれは、他者にいっさい依存しない生き方をすべきであるという「自立」 (independence) の追求とは区別されるべきである。自立が実際には不可能であり、むしろ幻想であることは、フェミニズムとケアの倫理を論じるときに確認されるだろう。

このように、市民の間に支配ないし抑圧が生じ、その平等な関係が損なわれることを避けるといふ観点から見れば、社会保障はすべての人びとに市民としての平等を保障するという目的をもっている。これは、⁽³⁾ 連の平等主義よりも、関係論的平等主義と親和性のある考えである。

それでも、他者のリスクや脆弱性に関心をもたず、かつ自分の能力に絶対的な自信がある合理的エゴイストであれば、連帯を拒絶するかもしれない。さらに、ひとたび連帯が成立すればそれにただ乗りする合理的エゴイストも現れる。

合理的エゴイスト（という私たちの一側面）にどう対処するかという問題は避けられない。彼らに対しては、生の動員や生の複数性がもたらす利得（あるいは、それらが失われたさいの損失）を強調する必要があるだろう。強制的な徴収の仕組みも避けられないだろう。しかしそれと並行して、多くの人びとがすでに（暗黙裡に）コミットしている諸規範（理由）を再構成し、明示化することも重要だと考えられる。以上の議論はそうした試みの一つである。

（齋藤純一・谷澤正嗣『公共哲学入門——自由と複数性のある社会のために』による）

（注1） ミシェル・フーコー——一九二六〜一九八四。フランスの哲学者。「生権力」とは、近代に福祉国家という形態で出現した、人間の生そのものを管理統制する新たな権力のこと。

（注2） ビスマルクの社会政策——ビスマルクは社会主義者鎮圧法を制定して労働者の運動を弾圧する一方、労働者の保護政策や社会保障政策を推進した。「アメとムチ」と呼ばれる。

（注3） すでに見た——本文の出典『公共哲学入門』の第八章で論じられた。

（注4） ファリリップ・ペティット——一九四五〜。アイルランド出身の政治哲学者。

（注5） アーレント——一九〇六〜一九七五。ハンナ・アーレント。ドイツ出身の政治哲学者。彼女の「複数性」とは、個々が相互に還元不可能なあり方で存在していることを言う概念。

*問題の作成上の都合で本文の一部に手を加えている。

問1

本文中の空欄

I

く

V

のうちで、次の文を補う箇所として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから

一つ選べ。解答番号は 17。

それは、集合的生命／身体の健康を害する、生産力を備えない、「国力」に負担をかける等々とみなされる人びとの排除や周縁化である。

①

I

②

II

③

III

④

IV

⑤

V

問2

空欄

X

・

Y

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は 18・19。

X

① 恒久化

② 疑問視

③ 正当化

④ 絶対視

⑤ 問題視

Y

① 負担

② 必要性

③ 劣等感

④ 重責感

⑤ 不可避性

19

18

問3

傍線部(1)「こうした不運に対する公的な手当てがなされてしかるべきではないか」とあるが、このようにいえる理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ① 本人の選択ではなく偶然にすぎない諸条件によって生が規定されることは、幸運な人物と不幸な人物との間の格差を生み、社会の安定の点で不都合だから。
- ② リスク対応としての社会保障は、先天的な条件によるリスクの偏在や個々人の経済格差の存在に対応できないため、公的な援助で補填することが必要だから。
- ③ 先天的な特性や所与の社会的条件など、当人に責任のない事情によって高いリスクを負った状態を放置しておくのは、平等主義の観点から容認できないから。
- ④ 自己の選択の結果ならともかく、偶然的な条件によって高いリスクを引き受けざるを得ない人は、公的な援助を受けることによって安心して暮らせるから。
- ⑤ 身体的条件や経済的条件の違いによる格差を緩和するための公的な援助によって、ひとりひとりが背負った生のリスクを解消することが期待できるから。

問4

傍線部(2)「生の脆弱性は非人称の連帯を求める理由となる」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- ① いずれ誰かに依存しなければなくなる人間の事実を考えれば、特定の個人という恣意的で欲望や判断も不安定な存在に依存するより恒久的に存続すると期待できる社会的制度に依存する方が合理的で安心だということ。
- ② 家族のような親密な関係の他者に依存している場合、その親密さがかえって互いの自由を侵害する結果をもたらしやすく、他者への依存を必要とする人間にとっては社会的に確立された制度に依存するほうが良いということ。
- ③ 他者への依存は人間の生の条件だが、依存する対象の意思ひとつで自己の自由が否定される可能性は常にあり、その可能性を排除するためには複数の人物に依存することで支配のリスクを分散させる必要があるということ。
- ④ 人間は何らかの形で他者に依存して生きてゆかざるを得ないが、特定の他者に依存することによってその恣意に拘束され自由が脅かされる危険が生ずるので、社会全体で個人の生を支える形のほうが望ましいということ。
- ⑤ 人間は必然的に他者に依存して生きるが、家族のように親密な関係の中での依存は互いの関係の調整が難しく、相手を束縛し自由を奪う結果をもたらすので、社会的に合意された相互扶助制度に依存する方が適切だということ。

問5

傍線部(3)「運の平等主義よりも、関係論的平等主義と親和性のある考えである」とあるが、どうということか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 運の平等主義は偶然と選択の区別が不分明な点で批判を呼びやすいが、関係論的平等主義に近い考え方は皆に共有される問題なため受け入れられやすいということ。
- ② 個人的次元で偶然生じた格差の是正を目指した考え方というより、大半の人が共有する潜在的な危険や利得に基盤を置いて相互扶助を唱える考え方であるということ。
- ③ 個人が偶然背負ったにすぎない条件による格差を是正する考え方ではなく、多数の人が背負っている運命を修正することに重点を置いた考え方であるということ。
- ④ 個人の次元の運不運によって生じた不平等を直接問題とするのではなく、それを他者との関係の次元に昇華させて結果的に平等を実現しようとする考え方だということ。
- ⑤ 個人の差異による格差を解消しようとする運の平等主義には副次的な問題もあるが、それを克服するのが他者との関係に立脚する相互扶助的な平等論であるということ。

問6

本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 23。

- ① 生の動員は国力の充実を目指すものだが、それに貢献する能力のない人間をも動員しようとするところに問題がある。
- ② 生の様々なリスクに対応するためのコストを分散させて共有するためには、リスクの偏在を解決する必要がある。
- ③ 誰もがいずれは他者への依存を避けられないが、依存する相手をよく選ばないと自由を奪われ支配されてしまう。
- ④ 生の複数性を重視し多様な生き方を保障することで、社会的資源が充実し多くの人々の利益となることが期待できる。
- ⑤ 連帯を拒絶したりそれを利用して利得を得ようとする合理的リアリストに対しては、強制的に料金を徴収すべきである。

第三問 以下の問いに答えよ。

問1 次の文章の「に」と同じ用法のものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

不当をいかに訴えても取りあげられなかった。

- ① 彼は複雑なパズルを簡単に解いてしまった。
- ② 何をするにも申請書を書かなければならない。
- ③ どんなに大変でも最後まで諦めてはならない。
- ④ 夫婦で互いに相手にプレゼントをした。
- ⑤ ここに一枚の懐かしい写真がある。

問2 すべて正しい漢字が使われている文を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① すべては有為天変し、止まることはない。
- ② あの人物の服装は、尋常一様ではない。
- ③ 諸行無常の縮観に囚われてばかりもいられない。
- ④ 高熱のために人事不肖に陥ってしまった。
- ⑤ 今こそ人心を一新して将来に蓄えるべきだ。

問3 A・Bの外来語とその訳語の組み合わせとして正しくないものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は 26・27。

A

26

- ① シンギュラリティー―固有性
- ② アクセシビリティー―利便性
- ③ ダイバーシティー―多様性
- ④ ケイパビリティー―将来性
- ⑤ サステナビリティー―持続性

B

27

- ① デフォルメー―変形
- ② コラージュー―組み合わせ
- ③ シンタックス―構文
- ④ ペダントリー―銜学
- ⑤ オマージュ―印象

問4 次のX～Zの漢字と読みの組み合わせとして正しくないものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 28 ～ 30。

X

28

- ① 女形 — おやま
- ② 河岸 — かし
- ③ 疾風 — はやて
- ④ 為替 — てくだ
- ⑤ 欠伸 — あくび

Y

29

- ① 鳩尾 — みぞおち
- ② 肌理 — きめ
- ③ 紐帯 — じんたい
- ④ 素人 — しろうと
- ⑤ 炯眼 — けいがん

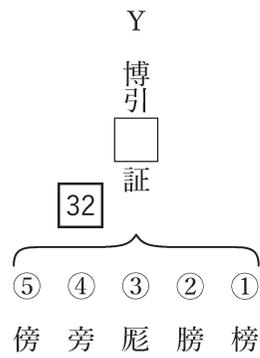
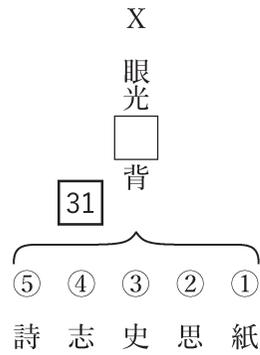
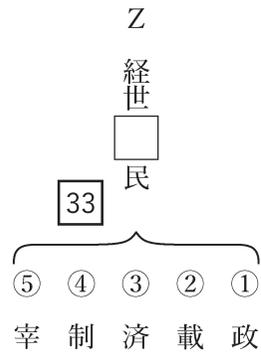
Z

30

- ① 独擅場 — どくだんじょう
- ② 依怙地 — いこじ
- ③ 長丁場 — ながちようば
- ④ 三行半 — みくだりはん
- ⑤ 流鏑馬 — やぶさめ

問5 次のX～Zの四字熟語の空欄を補うのに最も適当なものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は

31
33。



問6 次の熟語の意味として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

破天荒

- ① 何ものにもとられない自由奔放な姿勢のこと。
- ② 今まで誰もしなかったことをすること。
- ③ 簡単なことを積み重ねて大きな成果を出すこと。
- ④ 常識を踏みにじって周囲をあきれさせること。
- ⑤ 大きな志を抱いて些細なことなど気にしないこと。

問7 慣用句の使い方として正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① この家も建ててから数十年が経っているので、叩けばきつと埃が出るだろう。
- ② こちらの思惑通りに相手が反応したので、内心これはしたりと思つて嬉しくなった。
- ③ 彼の言い方や表情から察すると、私に対して何か含むところがあるに違いない。
- ④ 近所のスーパーマーケットの特売日に札付きのサンマを家族の人数分購入した。
- ⑤ 贅沢な生活に慣れすぎて、簡素な食事ではとても満足できないほど舌が肥えてしまった。

問8

作家と作品の組み合わせとして正しくないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

36。

- ① 石坂洋次郎―『青い山脈』
- ② 野間宏―『野火』
- ③ 永井荷風―『つゆのあとさき』
- ④ 森鷗外―『涇江抽斎』
- ⑤ 坂口安吾―『不連続殺人事件』

正 答 表

入試区分： 一般A日程入試1月30日試験

科目： 国語

問題番号	正 答	問題形式	備考
1	2	一問一答	
2	4	一問一答	
3	5	一問一答	
4	2	一問一答	
5	5	一問一答	
6	3	一問一答	
7	1	一問一答	
8	6	一問一答	
9	4	一問一答	
10	2	一問一答	
11	1	一問一答	
12	3	一問一答	
13	2	一問一答	
14	5	一問一答	
15	4	複数組み合わせ順不問個別	
16	6	複数組み合わせ順不問個別	
17	2	一問一答	
18	3	一問一答	
19	5	一問一答	
20	3	一問一答	
21	4	一問一答	
22	2	一問一答	
23	4	一問一答	
24	4	一問一答	
25	2	一問一答	
26	1	一問一答	
27	5	一問一答	
28	4	一問一答	
29	3	一問一答	
30	1	一問一答	
31	1	一問一答	
32	4	一問一答	
33	3	一問一答	
34	2	一問一答	
35	3	一問一答	
36	2	一問一答	